

「江別の天女」と無戸籍の私

天道 公平

「江別の天女」は、一筋の煙と化して天に昇り、地上に遺されたお骨は、彼女の両親の眠るふるさとの北の大地に還って行った。

☆ ☆ ☆

喪主であるという責任感と緊張感がかろうじて私を支えてくれた。そうでなければ私の精神は修復不能のダメージを蒙っていただろう。喪失してしまったものあまりの巨大さに打ちのめされていただろう。精神の均衡を保つには、葬儀・法要・遺品整理・相続手続・名義変更などの生活の雑事に忙殺される一定期間が必要だった。四十九日とは、本当によく出来た制度である。先人の叡智と言うべきか。

納骨が終わり、手元供養用に分骨していただいたミニ骨壺を祀ってある小さな祭壇に向かって手を合わせる日々が訪れるようになって初めて、このような文章を書く精神的な余裕が生まれてきた。

彼女の遺影写真を目にする、私の心は感謝の念で満たされる。思わず手を合わせ、拝礼してしまう。「ありがとう」という言葉しか浮かんでこない。彼女は文字通り「有難い」存在であった。

在宅介護で要介護4の彼女に付き添うことによって、私は彼女から病と老いについて真剣に学ぶ機会を与えてもらった。最後の入院の時には、息を引き取る姿を目の当たりにすることによって身をもって死

を覚えてくれた。彼女は私にとって〈生老病死〉全てに亘る唯一無二のメンターであった。

「水源地」第二号で私はこう書いた。

彼女と暮らしていると、「女は存在だが、男は現象である」と喝破された多田富雄先生の言葉が身に沁みる。ここ四半世紀の私という現象は、存在の慈愛あふれる庇護の下で無心に遊び戯れる幼子のようなものであった。

私をそっと包んでくれていた〈慈愛〉はもう失われてしまった。無心に遊び戯れる幼子の時代は、あまりにもあっけなく終わってしまった。これからの私には、少年期・青年期・壮年期・老年期と成長していく時間はもう残されていない。

蛹が成虫になるような完全変態こそが私の生き延びる唯一の道である。成虫としての寿命の短さは覚悟している。これから目指すのは〈脱皮〉である。天女の後を追うには〈羽化〉が必要だ。

私にとつての〈羽〉とは戸籍を指す。彼女は生前よくこんなことを言っていた。「生ゴミとして出すわけにはいかないんだから、死ぬ前に戸籍だけはちゃんとね！」と。私の最期を看取るつもりでいる女性でなければ、こんなセリフは出てこない。今まで聞き流してしま

っていた私が愚かであった。彼女の遺言であるから守らなければならぬ。私の戸籍復活への道のりは、これから新たな局面へと突入していくことになるだろう——きちんと死ぬために。

彼女の存在なしに、私がこの世で生きていくのはなかなか大変なことである。なにせ私は、書類上ではとっくの昔に死んだことになっているのだから。死んでいるはずの人間の住民登録は受け付けてもらえず、法的にはこの世に存在していない私にはマイ・ナンバーも無い。「マイナ・カードを持っていない」という意味ではない。私のマイ・ナンバー自体が存在しないのである。

マイ・ナンバー制度導入時に私の就労機会が奪われずにすんだのは、事実をさらけ出して私が会社を説得したからである。私を雇っているということは、働く資格もない不法入国した外国人労働者を雇っているようなものである。よくぞ受け入れてくれたと感謝している。

おかげで今でも所得税は徴収されているが、当然のことながら私には選挙権は与えられていない。住民税も払っているが、公立図書館で本を借りることもできない。車を動かすくらいは私にもできるが、路上を走行することはできない。免許証はもちろんのこと、パスポートも取得できない。現状のままで外国に行きたければ、必然的に偽造パスポートに頼る他はない。海外遊行を試みた時点で私は犯罪者である。私は江東区民でも東京都民でもなく、日本国民でさえない。日本国民としてカウントされていないから、コロナ・ワクチンの接種券は届かないし、給付金も受け取れない。公的機関から私宛に届くのは税金

の通知書だけである。戸籍の有無などには一切関知せず、私の存在を認めてくれているのは税務署だけである。敵ながらアツパレと言うべき。

いつの間にか戸籍は抹消され、何ひとつ身分証明書を持っていない私が、公的機関で何かの手続きをしようとする、いったいどういう事が起きるのか。一例を挙げておこう。

私を厚生年金に加入させるために会社は尽力してくれたが、私の年金手帳の再交付に対し、社会保険庁は最後まで首を縦に振らなかった。それでいて、「あなたの会社があなたを厚生年金に加入させることに対しては、反対も妨害もしません」と平然と言ったのけた。「そのためには年金手帳の再交付が必要なのです」と私がいくら訴えても、「記録がありませんから」と一言で却下された。「再交付してくれないということは、妨害しているのと同じなんですけど……」と言ったら無視された。

「分かりました。じゃあ、新規に入ります。遡って納付可能な保険料は、今この場で全額払いますから、国民年金に加入させて下さい」と頼んだら、「死んだことになっている人は加入できません」と即答された。

それなのに、社会保険庁から日本年金機構と名称だけ変えた後に、年金事務所は会社に直接イチャモンを付けてきた。「この従業員から保険料を徴収していないのは、いったいどういうわけだ！」と。こういう時のために、私はあらかじめ会社に身上書を提出してある。監督

官庁の方から私に関してウルサイことを言ってきたら、これで対応して下さいとお願いしてあるのだ。年金事務所との応待に当たった総務部長は黙って私の〈身上書〉を差し出したらしい。「天道さん、効果抜群ですよ。二度と言ってこなくなりましたよ」と報告してくれた。

我が家人の逝去の知らせを年金事務所に伝え、わざわざ事務所まで出向いて、事後処理のために必要な書類に記入して提出したのはこの私だが、その私に対し事務所の職員は、「いくらあなたが実質的な配偶者であったとしても、戸籍のないあなたの口座に未払い分の年金を振り込むことはできません」と言い放った。「それでは彼女の夫のお兄さんの口座に振り込んで下さい」と頼んだら、「生活を共にしていたという実績のない方には、たとえ親族であったとしても振り込むことは出来ません」と平然と答えた。「当然受け取れるはずであった彼女の年金は、じゃあどうなるんですか?」と訊いたら、口をつぐんでしまった。

あきれ返った私は、こう問いかけてみた。「あなたはいったい何を怖れているんですか? あなたの言動は自分の身を守るための行動ですよ?」と。もちろん、私の質問の意図が相手に伝わるはずもない。「縁なき衆生は度し難し」とお釈迦様も言っておられる。

主義・主張・原理・原則を振りかざし、それを盾にして目の前にいる人間を見ようとするんじゃないヤツらを私はイヤになるほど目にしてきた。だからこそ、我が家人は私の目には「天女」のように映る。このような女性が存在していた証として、この場で写真も公開しておこう。法名・釋尼妙美。享年六十五。あまりにも早過ぎる死であった。

あなたの分まで生き抜いてみせます。本当にお世話になりました。合掌!



「江別の天女」

【補記】

① 見舞いに行く度に、「じゃあね、また来るからね」という私の言葉に反応して、私と一緒に帰ろうとする素振りをみせる彼女の姿を見るのは辛かった。「こんな所に一人にさせないで!」と

訴えているようであった。

あれほどおウチに帰りがっていたのに、マイケル（我が家の愛猫、アメリカン・ショートヘア、十四才、♂、群馬県生まれ）にも会いたがっていたのに……。自宅で看取るという選択もありえたはずなのに、予想されるあまりの困難さに怖れをなした私の心の弱さゆえに、彼女を病院に丸投げしてしまった私の行状を思い起こすと、悔いだけが残る。

② 我が家のリビングはもう既に病室状態であったし、ケア・マネージャーの尽力と介護保険のおかげでそれなりの介護体制も出来上がっていたのだから、落合恵子さんが母上を自宅で看取った時のような事も可能だったはずである。なぜ私にその決断が出来なかったのかと、悔いだけが残る。

③ この歳になって「レモンちゃん」の大ファンになるとは想像もしていなかった。落合恵子さんの『母に歌う子守唄』（朝日文庫）をなぜもっと早く私は読まなかったのだろうか？ 読んでさえいれば、介護「される人」の気持ちにもっと寄り添うことが出来たはずなのに、介護「する人」の論理をふりかざしてすませってしまうことも避けられたはずなのにと、悔いだけが残る。

(二〇一三・一〇・一)



お母さん、帰って来ないニャー